

クルターグ：《ピアノのための遊び》より J.S.バッハへのオマージュ

ジェルジ・クルターグの《ピアノのための遊び》は、1973年から半世紀以上にわたり書き継がれているピアノ曲シリーズ。バルトークの《ミクロコスモス》に倣った教育的な意図のもと、子供の自由な遊びや即興性を音楽の出発点としているため、伝統的な楽譜の読み方にとらわれない図形楽譜や特殊奏法なども多用されている。1曲が数秒から数分という短い断章（アフォリズム）形式を採用し、特定の人物へのオマージュや個人的なメッセージが込められた楽曲が多く、「J.S.バッハへのオマージュ」もその一つ（「J.S.バッハへのオマージュ」と題された作品は曲集内に複数存在し、「ピアノ連弾によるトランスクリプション」が多いが、ソロ作品もある）。

J.S.バッハ：《平均律クラヴィーア曲集》より

《平均律クラヴィーア曲集》はケーテン時代（1717-23）の作とされ、全ての調性による「前奏曲」と「フーガ」から構成された、全2巻48曲におよぶ大作。

《第1巻》の「第21番 変ロ長調」は、速いパッセージやアルペジオ、トッカータ風の華やかな旋律を持つ前奏曲と、三声で構成された明るい主題と2つの対位句が組み合わさったフーガからなる。

「第8番 変ホ短調」は、莊重な面持ちでゆっくりと歩む前奏曲と、グレゴリオ聖歌を想起させる主題を用いて緩やかに展開する三声のフーガからなる。「第13番 嬰ヘ長調」は、12/8拍子の優雅で牧歌的な雰囲気を持つ二声の前奏曲と、三声で構成されたトリルを含む装飾的な主題にもとづくフーガからなる。

《第2巻》の「第4番 嬉ハ短調」の前奏曲は、9/8拍子で書かれた三声のシンフォニア風の楽曲で、哀愁漂う抒情的な旋律が対位法的に絡み合う。フーガは12/16拍子の三声で、急速な三連符の動きが絶え間なく続き、技巧的かつ力強い推進力を持っている。

ラヴェル：《クープランの墓》より フーガ

ラヴェルが1914年から17年にかけて書いた《クープランの墓》は、第一次世界大戦で戦死した友人たちへの献辞を持つ組曲。18世紀フランス音楽の伝統を尊重した「前奏曲」「フーガ」「フォルラーヌ」「リゴドン」「メヌエット」「トッカータ」の6曲からなる。

その「フーガ」は、厳格な対位法とラヴェル独自の洗練された響きが融合した、静謐で瞑想的な音楽。曲集の中でも特に控え目かつ穏やかで、淡々とした表情を持っているが、三声からなるフーガは本格的で、主題の逆行やストレッタなど凝った技法が駆使されている。

J.S.バッハ：「イギリス組曲 第3番」「フランス組曲 第3番」

「イギリス組曲 第3番」は、1715年から20年頃に作曲された全6曲からなる組曲の第3曲。重厚なプレリュードに始まり、アルマンド、クーラント、サラバンド、ガヴォットI&II（ミュゼット）、ジーグの6楽章から構成され、特に冒頭の「プレリュード」は協奏曲風の華やかな様式を持ち、単独での演奏機会も多い。

「フランス組曲 第3番」は、1722年から25年頃に作曲された全6曲からなる組曲の第3曲。他の曲集に比べると落ち着きと哀愁を帯びた、内省的な性格が強い。全体は、アルマンド、クーラント、サラバンド、アングレーズ、メヌエット（I&II）、ジーグの6楽章から構成され、特に4曲目の「アングレーズ」は、同組曲の中でも特に有名で、軽快かつリズミカルな旋律を特徴としている。

J.S.バッハ（ブゾーニ編）：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番より シャコンヌ

このピアノ独奏用の「シャコンヌ」は、ブゾーニの名を知らしめることに最も寄与している作品と言えよう。原曲において本質を成している弦楽器としてのヴァイオリンの特性を換骨奪胎し、まったく新たなるピアノ音楽として成立せしめている。作品の骨格は原曲と同一であるにもかかわらず、ピアノのポテンシャルを極限まで引き出すことで、独自の莊厳さと空間的な広がりを備えた世界を現出させ、異次元の輝きを音楽に与えている。